最北限の花の島（利尻島・礼文島）を訪れて　　中村　豊

酷暑の羽田を発ち、新千歳空港で乗り換えた Bo-737 は強目の逆噴射で短い滑走路の利尻空港に着いた。本会の「幌延深地層研究センター見学」では悪天候により島影ひとつ見えなかったが、この旅は天気も晴れ、一年中25℃に届かない島の花の季節で期待できそうである。

利尻島

利尻島は、北海道稚内市の南西およそ 40km の海上にある周囲 61km の円形の火山島で、200 万年前に海底噴火によって生まれた。アイヌ語でリイシリは「高い島山」を意味する。

利尻山

島の中心部に位置する利尻山（標高 1721m）は古くから高くそびえる美しい姿が航海や漁場の目印とされた。利尻山は、複数にわたる火山活動の噴出物が積み重なってできた「成層火山」で、約 9 万年前までには現在のような山が形成されていたと考えられ、現在は火山活動を停止している。「日本百名山」著者の深田久弥氏は利尻岳を「島全体が一つの頂点に引きしぼられて天に向かっている。こんなみごとな海上の山は利尻岳だけである」と称賛している。利尻山は別名利尻富士とも呼ばれ、貴重な高山植物の生息地としても知られている。登山は鴛泊からの一般コースと沓形からの熟達者のコースがあるが、頂上への尾根は急な礫地で登山道の崩落が激しく往復約 9 時間と日帰りではかなりなハードワークである。

利尻島

礼文島

礼文島は稚内から西に約 60 ㎞にある。1 億年以上前の海底で堆積した砂岩や泥岩、火山岩の地層が隆起した南北に長い島である。中央に礼文岳（標高 490m）がある。アイヌ語では「沖の・島」を表す「レプンシリ」、利尻島の沖にあるためついた名としている。西側には車道はなく、全長 50 ㎞のトレイルコースがある。冷涼な気候により海抜 0 メートル地帯から多種類の高山植物が咲き乱れているため別名「花の浮島」と呼ばれている。礼文島の北部は樹木が少なくササ原となっているのは明治期の薪の伐り出しや、度重なる山火事によって樹木が消失したことによる。礼文島にも北部に小さな空港があるが、一般的には使われていない。利尻島からはフェリーで 45 分の距離にある。

北限の礼文島はなぜ高山植物の宝庫なのか？

礼文島は春から夏にかけて約 300 種の高山植物が咲き誇ると知られている。標高の低い礼文島に、なぜこれほど高山植物が生え、花が多いのであろうか。

氷河期には大陸とつながっていたので、高山植物の宝庫であるユーラシア大陸と樺太（サハリン）から多くの高山植物が移ってきたと考えられている。氷河期が終わると、大陸と切り離され、北緯 45 度の礼文島は冷涼な高山的気候と夏に霧が発生しやすく気温が低いことが多くの高山植物が生き残る理由の一つになった。そして複雑な地質と地形により、一年中西風が吹き、特に冬は強い季節風が吹くので、島の南北の岬や西海岸には雪が深く積もらない。雪が積もった方が地面は暖かく保護される。このため針葉樹やダケカンバなど寒さに強い木々が育たないことになった。生き残った木々も島民の暖をとる薪になり、無くなった。高山植物は背が低い。このため木が生えるような場所だと、太陽光線を受けることができないために枯れてしまう。木が生えることができない厳しい環境でも生き残ることができるのが高山植物である。多くは北方から氷河期にやってきた高山植物は寒さに強く、冬の寒さにも負けない生存システムを持っている。雪に保護されなくても、厳しい冬を生き残ることができたのだろう。このような理由が複雑に重なり、礼文島は標高の低い場所に樹林がなく、草地が広がり、美しい花の高山植物が多種類の「花の浮島」になったと考えられている。

礼文島北西部　スカイ岬とスコトン岬

これに対してすぐ南東にある利尻島には高い利尻山があるため、山裾は礼文島と比較すると風が弱い。さらに山があるために上昇気流が起きやすく、積雪が多く背が高い木が生き残ることができた。島全体としては木々が発展し、高山植物は森林限界より上の風当たりの強い利尻山の上部に日本アルプスの標高 2500 m付近で見られるような高山植物が沢山ある。したがって、利尻島固有種の高山植物は登山者にしか見ることはできない。しかし登山道は長くきついので、登山者も花をのんびり見ている暇がないのが現実だろう。

厳しい気候の差、高い山があるかないか。これがふたつの島で、海岸近くにまで花が多いか少ないかを決定している理由なのであろう。

礼文島の高山植物を撮る

このツアーには花ガイド同行のトレッキングがあり、山道の周辺は多種類の高山植物が咲き誇り、イヤフォンで説明を聞きながら、写真を撮りまくった。しかし、牧野富太郎博士のような分析眼もなく、高山植物写真家の高橋修氏が「虫の目になって」と言われても難しい。写真編集では花の名前が思い出せない。図鑑や地元の情報を集めて、何とか20数種を特定できた。

撮影できた礼文島の数種の固有種などを紹介する。

レブンアツモリソウ

レブンソウ

レブンアツモリソウはラン科の植物で、草丈は 10～30cm。花は直径 10cm 以上もある大きな花。袋状の唇弁が目立ち、上部の花びらが袋に蓋をし、左右にも花びらがあるように見える。群生地は縄文遺跡がある北部にあるが、花の時期は終わっていた。この花は礼文町高山植物培養センターで人工培養されている固有種。

レブンソウはマメ科オヤマノエンドウ属、25 ㎝ほどになり、白い絹毛の葉がついている。6 月から 1 か月の間に茎の先に紫の花を数個咲かせる。環境省レッドデータブック絶滅危惧種 IA 類に指定されている。この花は桃岩展望台付近で撮影した。

レブンウスユキソウ

エゾノコギリソウ

レブンウスユキソウは北海道固有種でキク科ウスユキソウ属の高山性多年草。アルプスのエーデルワイスの仲間。花のように見えるのは苞葉で、白い綿毛が全草に密集している。頭花は黄色い筒状花のみで、中央が雄性、周囲が雌性。今年は花の時期が早まっているのか、唯一この花が観察できた。

エゾノコギリソウはキク科ノコギリソウ属。草丈 10～80ｃｍの多年草。葉は長楕円形で長さ 3～7ｃｍ、大きな切れ込みはなく細かい鋸歯がある。葉の基部は半ば茎を抱く。頭花は茎の先に散房状につき、白色で径約 2cm 舌状花は 2 列に並び、12～19 個あり、総苞には密に綿毛がある。

オトギリソウ

エゾカワラナデシコ

オトギリソウはオトギリソウ科オトギリソウ属。草丈は 40～60cm ほど。茎先や茎と葉の付け根から花茎に数個の花が咲く。花弁は 5 枚。薬草として使われる。

エゾカワラナデシコはナデシコ科の花。細かな切れ込みのある花びらが特徴の背丈 30cm ほどで、島内に広く分布する。花期が長く、初雪の頃にも咲く株がある。

チシマフウロ

チシマゲンゲ

チシマフウロはフウロソウ属の多年草。日当たりの良い草地や砂礫地に生える。高さは 20～50cm。茎の先に直径 3cm ほどの花を多数咲かせるが、一輪のみあった。

チシマゲンゲはマメ科イワオウギ属。草丈 10～50 ㎝。太い根茎があり全体叢生する。葉腋から長い柄のある総状花序を作り、花は下向きに咲く。

田中陽希氏の百名山踏破プレートと利尻山

利尻島に戻り、2012 年に公開された映画「北のカナリアたち（湊かなえ原作、吉永小百合主演）」のロケ地に田中陽希氏（プロアドベンチャーレーサー）の日本百名山踏破のプレートが最終目標の利尻山の良く見える高台に遠慮がちにあった。